

【東京】ポストンバッグ一つで鹿児島から上京し、食品物流に携わり、保有車両900台超、従業員2400人、年商350億円の企業「南日本運輸倉庫(東京都野区)」を築き上げた大園博史氏(現会長)を父に持ち、2代目として、同社をけん引する大園圭一

に就任すると、会社の課題を見つけ、いち早く手を打つなど、経営者としての手腕を発揮してきた。そんな同社長がいま描くのは、10年後に年商1000億円企業にすることだ。

同社長の根底にあるのが、学生をはじめ、若い人たち、そして広く一般長の姿がある。「必要であれば上場も考える」と話す同社長、偉大な父を尊敬しながらも、その父を超えるべく挑戦が続いていく。

ただ、社長自身、学生を終えてすぐに同社に入社するわけではない。他人の飯を食う必要性から、全く家業とは別の会社で就職する。そして修業を終えた2000年の4月、26歳の時に同社に入社する。

係長として同社でのキャリアのスタートを切った同社長は、顧客対応など、対外的な問題もあり、課長に就任、6年間現場の管理に携わる。2006年に部長、2008年に取締役になると、その後、2010年に常務に、そして2012年に専務に就任するなど、足元を固めながら階段を上がっていった。

役員が上がることには責任は重くなっていったが、博史会長の存在があることで安心して仕事に取り組めたという。2014年に博史氏が会長に退く際に、社長に就任する。40歳になったばかりだった。

40歳で、南日本運輸倉庫という一大グループのかじ取りを担うようになったが、「組織がしっかりと出来上がっている中で、私自身はやることをやるだけだった」と着任当時をそう振り返る。

南日本運輸倉庫 大園社長 10年後、1千億円企業に



大園社長

郎社長。偉大な父親の背中を見ながら育った大園社長は、平成26年に社長

の人たちに、「面白いことをやっている会社だな」と興味を持ってもらえる会社にするのだが、そこにはグループで500名近い従業員、1000台近いトラックという

大所帯を背負う気負いは感じられず、あくまで自然体の同社

れていたの思い出」という。「あの時はほとんど意味がわからなかったが、その頃からしっかりと会社のことを叩き込まれていたのかなあ」と笑う同社長だが、迷うことなく同社に入社したことを考えると、博史会長から帝王学を学んでいたことがうかがえる。

役職が上がることには責任は重くなっていったが、博史会長の存在があることで安心して仕事に取り組めたという。

ただ、「数字のところはしっかりと把握し、誰よりも先に、会社の情報、特に課題に関しては、一番先に知ることを中心とした」という。数字を把握すること、そして早い段階で課題を見つけ、大きな問題になる前に芽を摘む。社長として一歩一歩着実に歩んだ。

社長就任から6年が経ったいま、会社の将来について、「必要であれば上場も可能性としてはある」としながらも「面白いことをやっている会社だなど、そう思われる会社になりたい」という。

その上で、「これからこの会社を支えてくれる若い人達のためにも、やはり規模も必要」だとし、「10年後の2030年に、年商1000億円企業を目指したい」と抱負を語る。

例えば、「輸出入に物流を絡めて海外に拠点を構えれば、働く者にとっては、海外に行けるチャンスにもなる」とし「働く人たちにわくわくしてもらえる、興味を持ってもらえる、そんな取り組みをどんどん行っていきたい」と意気込みを語る。

偉大な父親を尊敬しながらも、南日本グループのトップとして、独自のビジョンを示す同社長、2代目として同社のさらなる飛躍を目指す。

(高田直樹)